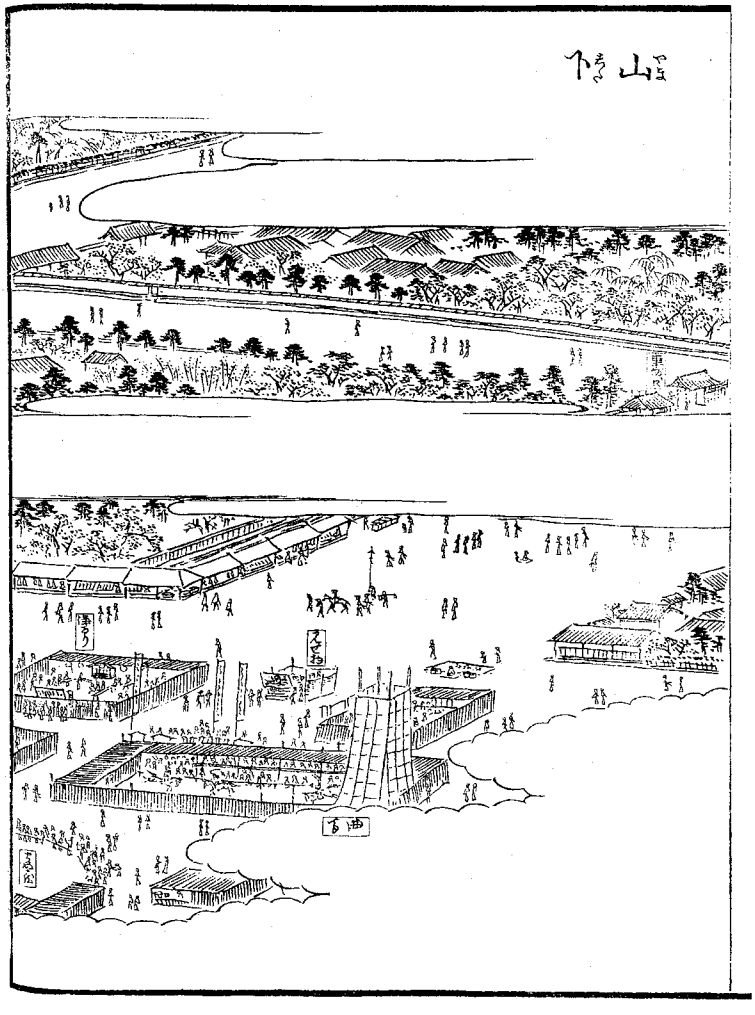
上野山下の遊興空間（下）

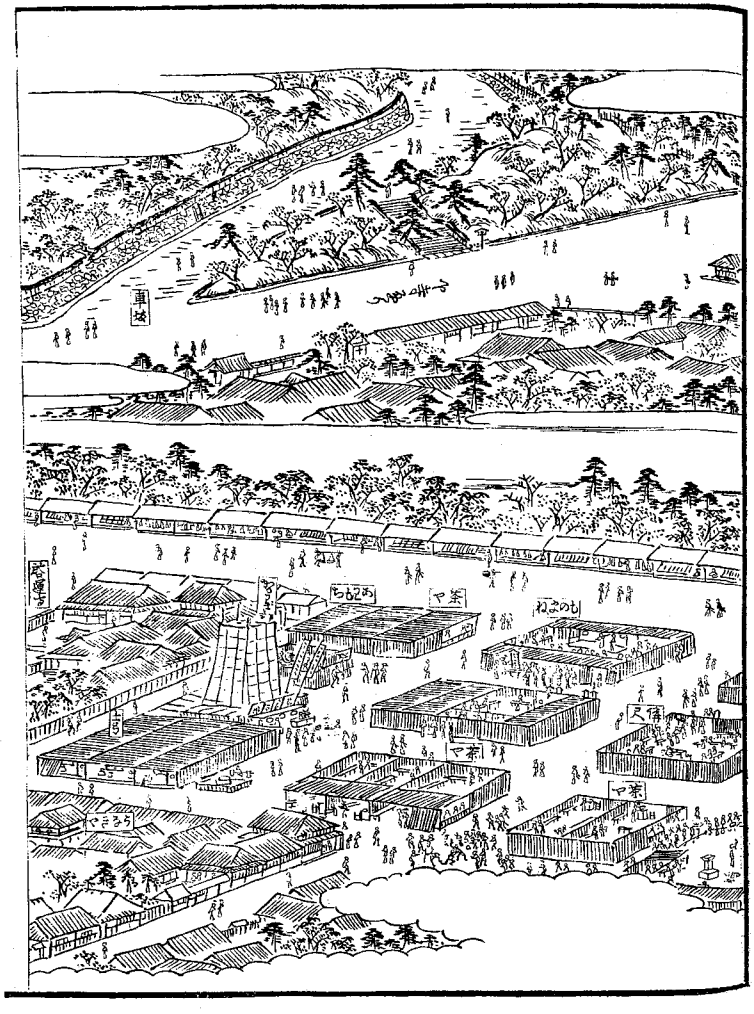
吉原　健一郎

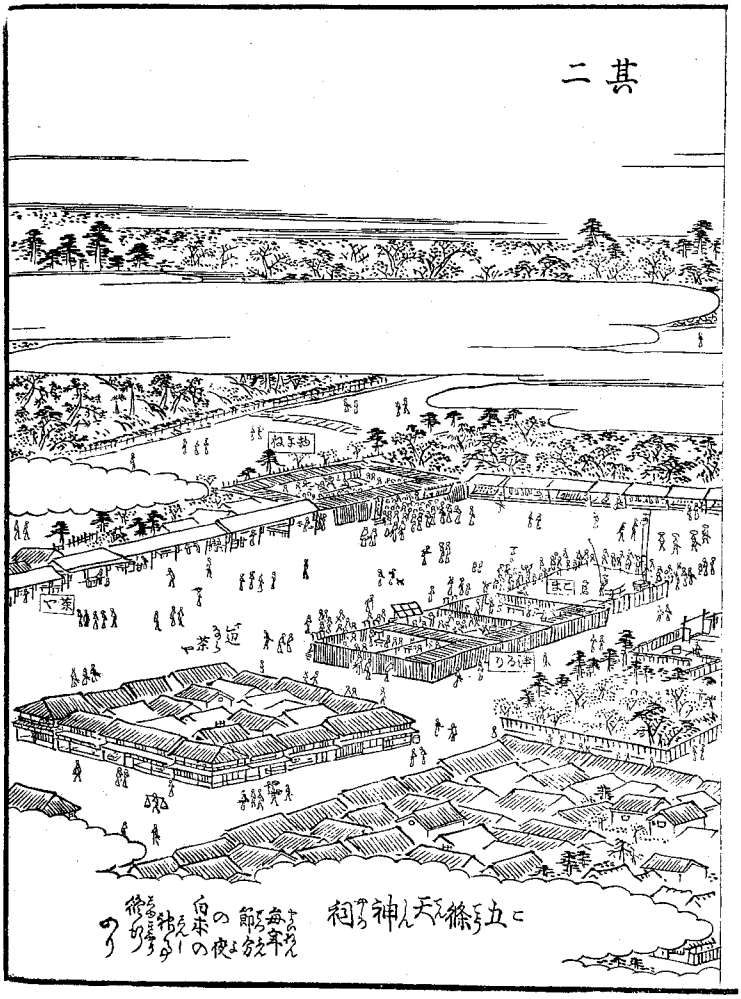
二　化政期の上野山下

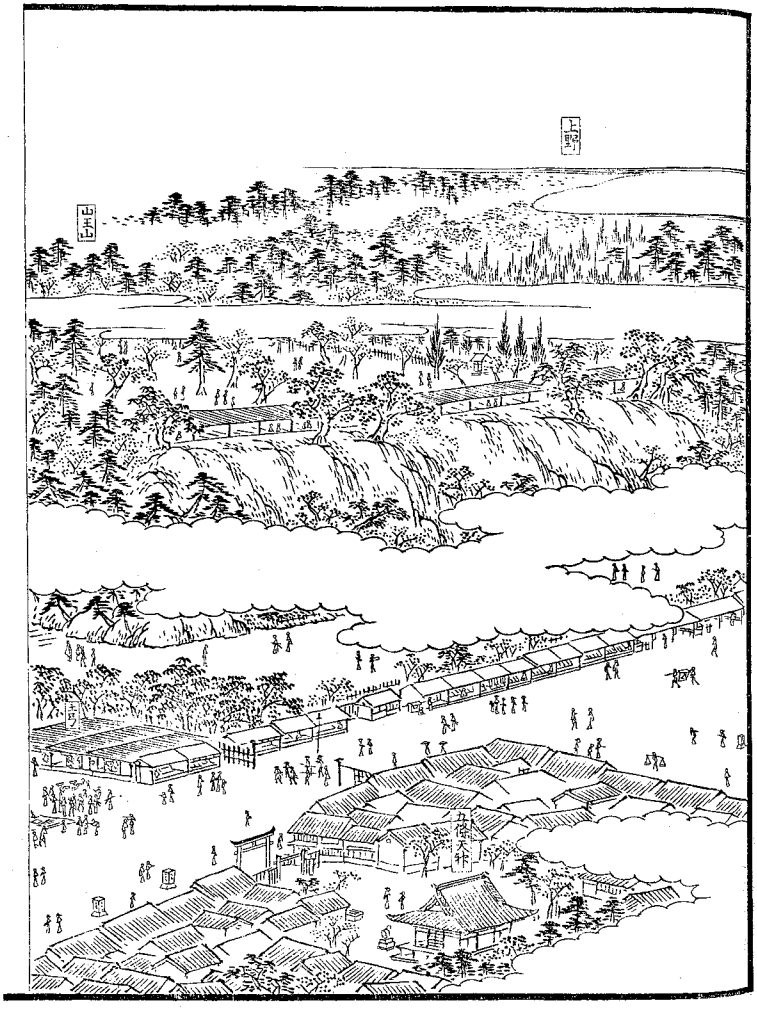
前節で述べたように、寛政改革によって岡場所としての上野山下は衰亡したが、民衆の遊びの場としての空間は一層の発展をみたのである。その様子を絵画的に表現したものとして斎藤月岑の『江戸名所図会』がある。そのなかの「山下」の部分をみると、五条天神から北へ上野山にいたる所から東側の山下一帯の様子が詳細に描かれている。文字による情報としては、「曲馬・見世物・浄るり・講尺・茶屋・ものまね・あわもち・かるわざ・こま」などが記されている。そのうち火除空地の部分については、小林信也氏の作成した概念図があるので、そのまま紹介しておこう。[19] ここで問題としてお

第2図　上野「山下」の光景（『江戸名所図会』）

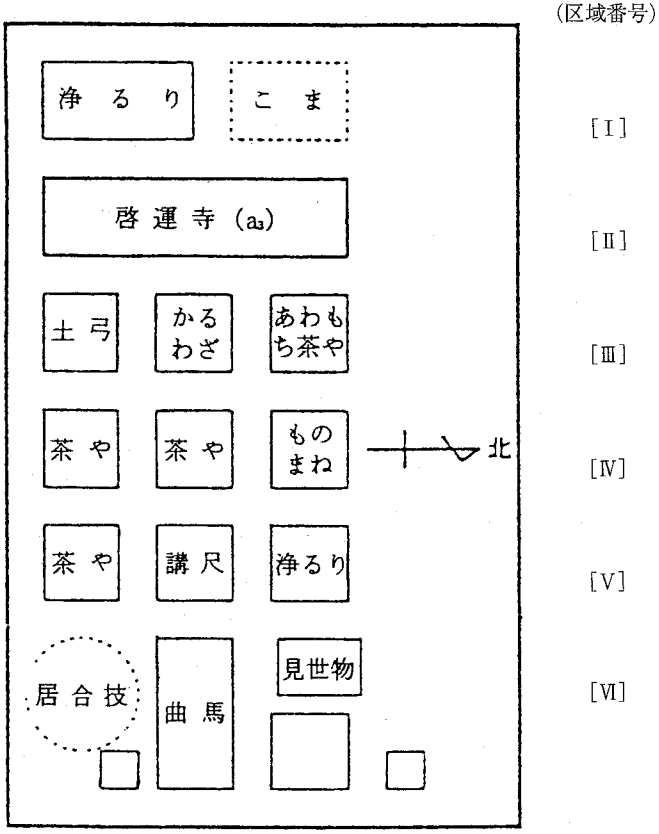



車坂
ちもとめ
ヤ茶
ねこのし
ヤ茶
ヤ茶
ヤ茶
やきとり


其二
祝ま曲
茶ヤ
茶ヤ
茶ヤ
りろ屋
祝神天満宮
白米の夜
毎年節分


上野
山王社
弁天社

第3図　上野山下概念図（『江戸名所図会』）



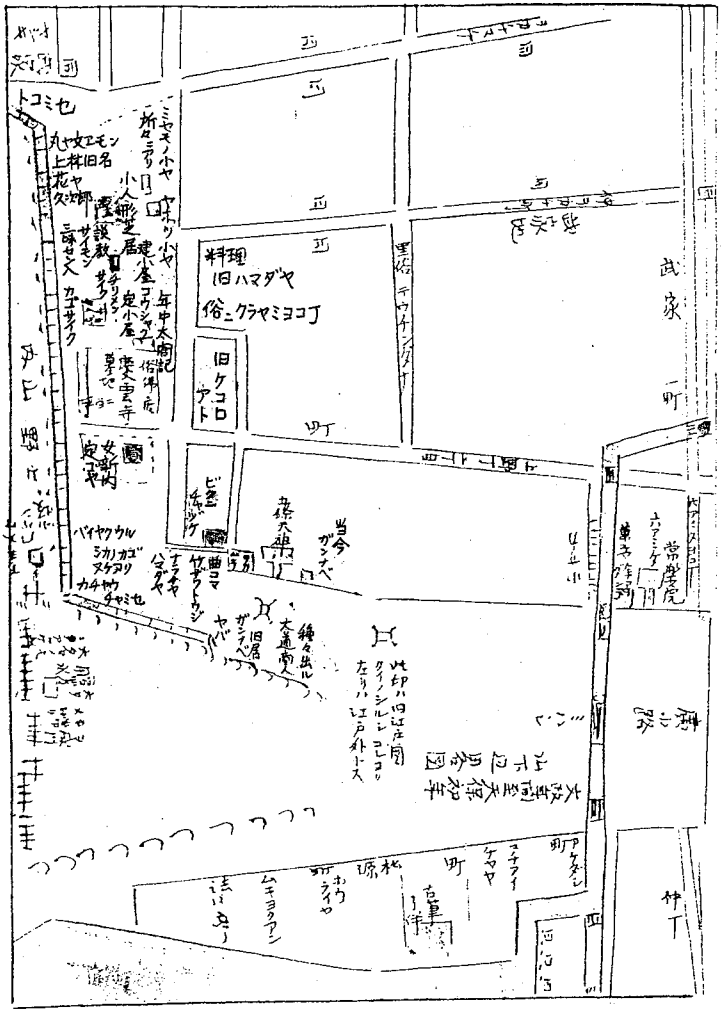
小林信也「床店」（『日本史研究』396）による。
図の外の区域番号は朝倉無声『見世物研究　姉妹篇』による。

くべきこととして、この絵がいつ頃の山下の様子を描いたものかということである。その時期を確定することは、『江戸名所図会』の成立事情を、より詳細に検討するうえでも重要ではないかと思われる。この点については、のちに取りあげたい。

山下とは狭義では、右の火除空地のことであるが、この空間全体を理解するためには、下谷広小路を経て三橋に至り山下に向かう一帯をも視野に入れる必要があろう。第1図（本論文（上）参照）で「ケコロ」の分布が、右の一帯にみられたことからも、こうした統一的把握が必要であることは疑いない。そこで、『江戸名所図会』をも参考としながら、「市井生活図説」所収の山下周辺図を検討してみたい。第4図にあるごとく、この図は「文政年間至天保初年」とされ、さらに解説文のなかにも「山下絵図ハ文政天保之頃、如図五条天神前上野の外種々の売薬小見世物出る、上野江添ひたる地ハ葭ずかこひにて料理の店あり、雁鍋初の見世なり、後に今の地へ普請なしたり」とあって、時期が確定されているのである。[20] この図と「山下今昔物語」[21]とを合わせて、山下一帯を概観してみよう。ただし、原図は見にくい部分もあるので、一部の文字を書きなおした（「トコミセ」の表記は三か所あったが、一か所のみ記入した）。

図の右下、広小路に沿って六阿弥陀で有名な常楽院がある。そのならびに松屋という上野御用達の袈裟縮衣の仕立屋があったようだが図にはない。さらに左（北）へ行き、忍川にかかる三橋の角に上野御用達の菓子司であった金沢丹後の店がある。三橋を渡って下側は東叡山の拝領地で上野仁王門前

第4図　山下辺略図（「市井生活図説」）


料理
旧ハマダヤ
俗ニクラヤミヨコ丁
旧ケコロヤト
武家
一町
当今
ガンヤベ
常磐屋
菓子作製
竹ヤトウシ
ヤバ
旧居
ガシベ
大通東
縄々出ル
ヒ
ビ
ビ
ビ

町の町屋などであった。まず「アケダシ」と図にあるのは「揚出し」という惣菜料理屋で、化政年間に営業をはじめたという。ついで「マチアイ　チャヤ」は、出合茶屋で江戸を代表する男女出合いの施設が上野一帯に多かったのである。つづいて「松源」と「ホウライヤ」は料理茶屋で、『江戸買物独案内』にも「御料理　上野仁王門前　松坂屋源七　御婚礼向仕出し仕候」「加州御用　御料理　上野仁王門前　蓬萊屋亀吉　御婚礼向仕出シ仕候　即席寄合」と記載されている店であった。同様に「ムキョクアン」も「東叡山御用　御膳生蕎麦　上野仁王門前町　無極庵　河内屋瀬平」という名代の蕎麦屋であった。『江戸名所図会』の「東叡山黒門前　忍川・三橋」の図には、不忍池に面したこれらの店が、庭木越しに池を眺めて食事ができるように工夫されている様子が描かれている。また「此辺薬屋おほし」という記載もある。

つぎに、御成道をはさんだ反対側（東側）をみることにする。五条天神の手前に「当今ガンナベ」と記されている（第4図）。これは雁鍋という下谷の名物であった料理屋である。当初は五条天神の向かいの土手のところにあった一膳飯屋が大いに繁昌し、文政の末年に移転したのだという。

五条天神の前の道路上にある記号は、図にあるごとく榜示杭のあとで、江戸府内外の境を定め「此所より内小荷駄口附之者不可乗也」と記した杭が建っていたところであるという。ちなみに「本郷も兼康までは江戸の内」という川柳は、この杭から湯島の切通しを経て本郷に至る道に江戸の境があったことをしめしている。文政のころの府内外をしめす朱引線はさらに広域におよぶものであるが、あ

る時期までは、この線が江戸の範囲であったのである。このことと関連して、いわゆる床店は、図にあるように杭から北へ上野山に沿って車坂口まで展開していることがわかる。この床店の起立は貞享三年（一六八六）であり、当初は一五〇軒が許可されていたが、文政九年（一八二六）には一一四軒であったという。[22] すなわち、山下の火除空地が盛り場化する元文二年（一七三七）よりも以前に、盛り場の素地が形成されていたのであり、これら床店が許された時点では、江戸府外であったことが成立の有利な条件であった可能性があろう。文政・天保年間に至っても、この杭の位置が図に記されていることにも意味があるのである。

五条天神の北角にある岡村は料理屋であり、その裏の小路は肴店と呼ばれていたが、理由は明確でないという。小路をへだてて北に曲独楽の名人であった竹沢藤治の定小屋があった。第4図の黒く塗られた部分（実際は茶色）が、その位置をしめしている。その北の角が奈良茶飯屋の浜田屋であった。『江戸買物独案内』では「あは雪　御なら茶所　上野御山下　濱田屋利八』とあり、もう一か所「名物　御ならちや所　上野御山下　濱田屋利兵衛」とあるから、そのいずれかであろう。屋号などからみて、両店は姉妹店である可能性がある。『江戸名所図会』（第2図「其二」）にある「此辺なら茶や」とある場所に該当する。図には、近くに「ビクニチャヅケ」なる店名もみられるが、「独案内」には掲載されていない。

浜田屋の角を曲った所が、山下の火除地空間である。朝倉夢声の説明するように、ここには多種多

様の芸能などが存在し、しかも恒久的建築でないむしろ小屋で営業していたことから位置も固定的ではなかった。しかし、『江戸名所図会』の図があり、「山下辺略図」が残されていることから、両者の関係、および「略図」の内容について吟味しておくことは意味があろう。

そこで、まず寛政三年（一七九一）以降と推定される山下一帯の光景を描写した「山下新談」を検討しておこう。(23)

山下新談

名にしおふ花の御江戸の花盛り、弥生の空いとのどやかなる比、上野の山の賑わひいふもくだなり、殊に元三大師の縁日、浅草観世音ゆしま天神への往来、吉原通ひの四手駕籠、蟻の御堂参りにひとし、山下には豆蔵女太夫講釈師役者の身振り声色物まね、鶴市が輩葭ず張をかまへ、其外人形からくりこま廻し居合の歯磨本弁屋のはかね打、十三屋が唐くし（住宅は池の端ニありしが今いか、）草双紙屋が錦絵、古道具屋小間物きせる烟草入植木三ッ物三ッ星の膏楽、朝鮮の弘慶子、阿蘭陀の福輪糖、あまいだむまいだのお駒飴、奈良茶あわ雪鱈のかば焼うどんそばきり幾世餅、又八団子の評ばんよく、料理茶屋は魚鳥の山をなし、水茶屋は床机に花呉座を輝し、揚弓場碁将棊所軒を竝べ、色ある婦人粧ひをこらし、往来の人の足を止む、

ここには山下の芸人のみならず、床店の商売や料理茶屋など、当時の名物にいたるまでが描写されている。この状況を寛政三年以降としたのは、右の「鶴市が輩葭ず張をかまへ」という部分に着目し

たからである。この鶴市なる人物は、日本橋の中洲で物真似声色を業としていた松川鶴市であるという。寛政三年の中洲取払いののち山下へ来て、第4図の「カチョウチャミセ」の北隣の角で演じていたが、まもなく廃業して僧になった。その場所に東藤六が物真似を続け、文政期には藤六も去り、そのあとは矢場と水茶屋になったといわれる。この位置が『江戸名所図会』（第2図「其二」）の「物まね」とある所である。したがって、この図は文化年間以前の山下の様子であると考えてよいだろう。

同様に、この図の年代比定は第4図の「カチャウチャミセ」からも行うことができる。花鳥茶店は花鳥茶屋ともいわれ、また鳥獣茶屋・鳥茶屋ともよばれていたようである。文政初年のころに流行したといわれる唄と茶屋の説明・口上が「市井生活図説」にある。[24]

此地文化より文政の頃、殊ニ繁花なり、文政初年時代唄あり

〽下谷山下ニヤア鹿の駕ぬけ、曲馬の梯子乗、駕篭細工ニ縮緬細工に布袋の高笑ひ

鳥獣茶屋ハ種々鳥獣アリ、殊ニ鹿ハ中仕切江口の渡り壱尺七八寸の駕篭を居置、口上の者しきふ（に）て鹿ハ角を背ニ付ケ、前足を揃へ見事ニ飛抜る、又々元へ飛抜帰る、此口上演て人を集る者達弁にて終日よび立る

〽サア入ラしつて御覧なさい、代ハおかへりわづか十六文、阿蘭陀渡り唐渡り、赤ひが金鶏、白ひが白鶏（ママ）。孔雀がゐる。鶴がいる。朝鮮から渡たばりけん鳥。きうかん。山鳥。高麗雉子。金鳩がいる。銀鳩がいる。百人一首の和歌の内ニ出たる鵲（かささぎ）のとり。蝦夷か島から渡る大鷲、立ぜい

が壱尺五寸ある。雷獣（衍カ）。雷獣ハ雷鳴動の時付添出る。日光つくばの山あいに住ミ、かしこで杉の木が折る。爰で松の木が折たといふハ皆かれらがわざ、恐多くも上様御上覧の品々、さあいらしつて御覧なさい、代ハ御帰り〳〵

朝倉夢声によれば、この花鳥茶屋の場所は先述の物真似の南隣にあたるという。ところが『江戸名所図会』をみると、南側に「茶や」と記されている所もあるが、花鳥茶店らしき図柄はみられない。したがって、この図は花鳥茶店ができる以前の山下の様子であると思われ、やはり文化年間までと時期的限定を加えてよいと考えられる。この花鳥茶屋は外国産の鳥なども飼育している近代の動物園の江戸版ともいえる施設であるが、当時の唄にあるごとく鹿のカゴヌケが名物であった。それ以外の曲馬などは山下の火除地の名物である。

花鳥茶屋前から東側が山下の火除空地である。朝倉夢声は、この空地を六つの区域に分けて説明している[25]。本稿でも、この区域分類を基に検討しておきたい（第3図区域番号参照）。第Ⅰ区域は空地の最も西の部分で、文化年間までは浄瑠璃小屋と曲独楽の大道芸が行われていた。文政以降は娘新内の定小屋が浄瑠璃小屋にかわって営業していた。

第Ⅱ区域は慶（啓）雲寺の区画である。『江戸名所図会』では、北側に寺の建物が描かれ、南側は樹木でおおわれている。この周辺は俗に仏店と呼ばれ、その南側の小路はクラヤミ横町といわれ、田沼時代の「ケコロ」の中心であった所である（第1図参照）。横町の東側には鰻蒲焼で有名な大和屋と、

料理屋浜田屋があったが、浜田屋は寛政改革後は移転して前述の奈良茶飯屋となった。大和屋は蒲焼の元祖といわれた店で、『江戸買物独案内』にも「江戸元祖　上野御山下佛店　元禄年中ヨリ連綿大和屋利右衛門」とある。この店は維新前まで、この場所で営業していたという。また、慶雲寺に添って葦簾囲いの講釈場があり、里谷という講釈師が一年中太閤記だけを読んでいたという。

第Ⅲ区域は北から粟餅の曲舂小屋、稚軽業、土弓場が並んでいた。なかでも稚軽業は山本小島という子供の太夫が、はしごの曲乗りや元結の糸渡りなどの芸によって大変な人気であったという。第4図をみると、このあたりに籠細工見世物小屋が記されているが、朝倉夢声によれば、この小屋は第Ⅳ区域にあったとしている。これは区域割りが変化したのか、その他の理由によるものかは今後の検討課題である。

第Ⅳ区域は、第3図にあるように、北側に物真似小屋があり、その南には水茶屋があった。文政初年になると、北側に先述の籠細工見世物小屋、南側に縮緬細工見世物小屋ができたという。籠細工は大坂の名人であった一田正七郎が人物・鳥獣・草花を籠でつくり見物に供したという。また縮緬細工は木の人形にちりめんを貼りつけたものであった。そのなかでも大江宇兵衛の笑布袋は、さきの唄に「布袋の高笑い」とあるように名物として有名であった。これは小屋の奥のなかに布袋の寝像があり、そばで呼び起こすと目をさまし、ウチワを持って踊り、最後に大笑いをするという見せ物であった。のちに、この小屋では高さ二丈余の五重塔せり出しの見世物が興行されたという。また籠細工小屋の

第5図　桶　松

「市井生活図説」（『諸国叢書』第五輯）

あとに、貝細工や元結細工などの見せ物が行われた。つまり文政年間以後は、この区域は各種細工見せ物の空間として客を集めたのである。

つぎの第Ⅴ区域は、文化年間までは、北から浄瑠璃小屋・講釈場・小茶屋が並んでいた（第3図参照）。文政にはいると、北側は説教祭文の小屋となった。第4図にあるごとく三味線の伴奏による祭文が演じられたのである。その南側は小人形芝居の小屋となっている。

最後の第Ⅵ区域は、もとは曲馬梯子乗の囲い地であったが、文政期以降は各種の見世物小屋が建てられ、怪しげな興行を行ったという。『江戸名所図会』にも、すでに曲馬のほかに、見世物小屋などが描かれている。この区域の南側には、田沼時代に有名な鶴吉という大道芸人が、鎌・豆・徳利を手玉にとる妙技を演じていたという。寛政年間に鶴吉が名古屋

に隠退し、そのあとには桶松という放下師が籠抜けをしていたという[26]（第5図参照）。その東側の御徒町筋のところで、山下の火除空地が終るが、北側の床店のなかで、『柳多留』の版元として著名な花屋久次郎が営業を行っていたという（第4図参照）。

おわりに

以上みてきたように、上野山下の火除空地は多様な遊興空間であった。しかも、再三指摘したように、文化期以前と、文政期以降とでは種々の変化が認められる。その特徴は文政期以降になると、見せ物や演芸といった各種芸能が一層多様化し、この空間の遊び場としての性格が強められていくことであろう。その意味では、長谷川雪旦の描く『江戸名所図会』の上野山下は文化年間までの様相を記録したものとして重要であるが、さらにその後の状況を図とした「市井生活図説」も、この地域の文政年間の実態を理解するうえで、きわめて参考になる図ということができる。

江戸という大都会にあっては、このような遊興空間が重層的に存在したのであるが、その意味に関して、西山松之助氏は「盛り場という独特な文化センター」という定義を与えている[27]。たしかに、一般庶民の生活・文化を考えるばあい、日常的な行動文化の一側面として盛り場が庶民文化の凝縮した空間であると考えてよいだろう。詳細は省略するが、その後、盛り場に関し、封建的支配のなかで、

その圧迫から逃がれ得る空間であるという規定が多分野の論者によって指摘されてきた。小林信也氏は、こうした諸研究を否定し、その内部の具体的分析が必要であると指摘されている。[28] もちろん、盛り場の内部構造の分析の必要性を強調されることは納得できる。しかし同時に、盛り場とは何かという規定についての議論は進めなければならない。[29]

上野山下のばあいには、すでに十八世紀はじめから床見世をはじめ、各種の料理店などが集合した空間であった。しかし元文二年（一七三七）の火除空地の設定によって岡場所として発展し、盛り場化したのである。同時に大衆芸能の場としても発展をみせ、岡場所取締りののちも、この分野での文化センターとしての性格は強まっていったのである。とくに化政期には、文化期よりも文政期に、その特色が強くなったことは、すでにみたとおりである。江戸の庶民の遊興ないし遊楽に関し、文化史的考察を一層深める必要があるだろう。

最後に、本稿に関し延広真治氏より御教示を得たことに感謝したい。また本稿は平成七・八年度成城大学特別研究助成「前近代における交通」の研究成果であることを付記しておく。

註

(19) 小林信也「床店―近世都市民衆の社会＝空間―」（『日本史研究』三九六号、四頁）。図中の(a_3)とは寛永寺ではない寺社として氏が分類した記号である。氏の研究は、上野山下の床店に関するものであり、その

前提として、『江戸名所図会』によって、山下一帯の状況を概念化している。

(20) 『諸国叢書』第五輯、四三頁。

(21) 朝倉無声『見世物研究　姉妹篇』三六頁以降。以下、この部分について本書からの引用はいちいち註記しない。

(22) 小林前同論文（前同誌、一一頁）。

(23) 「岡場遊廓考」（『未刊随筆百種』第一、一九一頁）。

(24) 『諸国叢書』第五輯、六頁。前掲『見世物研究　姉妹篇』（四一頁）にも、これと同じ引用があり、その出典は写本『世の中のくさ〳〵記』であるとしている。とすれば、「市井生活図説」の著者もこの写本から引用した可能性が高い。

(25) 註（21）に同じ、四二頁以降。

(26) 「市井生活図説」に「桶松　此者旧桶職人なり、下谷山崎町に住、山下へ出て放下（てづま）なし、又悴伊三郎駕篭抜をなしたり」とある（『前同書』四四頁）。

(27) 西山松之助『大江戸の文化』（日本放送出版協会、昭和五十六年）一四五頁。

(28) 小林前同論文（前同誌、二四～二五頁）。

(29) この点に関し、千葉正樹氏は「「埒外」の広場―江戸火除地と社会」のなかで、自身の体験をもとに、盛り場におけるイベントの提供者と利用者の双方の視点からのバランスのとれた研究が必要であると主張されている（『国際文化研究』第二号、五七頁）。たしかに、盛り場の「場」の具体的検討をさらに進める必要があろう。